

〔教育実践報告〕

「女性学ゼミ」の実験（５）

小 森 治 夫

はじめに

I. 「女性学ゼミ」においてとりあげた文献

II. 学生による「女性学ゼミ」の評価

おわりに

はじめに

「女性学」と「男性学」をテーマにとりあげた私のゼミナール活動について、『女性学ゼミ』の実験」と題する拙論を『商経論叢』第48号において発表したのを皮切りに、『商経論叢』第49号においては『基礎演習』における『女性学ゼミ』の実験」と『女性学ゼミ』の実験（３）」を發表し、『商経論叢』第50号においては『基礎演習』における『女性学ゼミ』の実験（４）」を發表した。

そこで、本紀要第51号では、私が鹿児島県立短期大学に赴任して4年目と5年目に担当した「女性学ゼミ」の実験について報告することとしたい。

I. 「女性学ゼミ」においてとりあげた文献

まず、私が「女性学ゼミ」でとりあげた4冊の文献について、紹介しておきたい。

最初に、日本における「女性学」のパイオニアの一人である、井上輝子氏の『女性学への招待』（有斐閣）をとりあげた。

この本では、女性のライフステージにあわせて議論が展開されており、「女性学」への入門書として、わかりやすい構成になっている。ただ、私からみれば、著者の主張には、「男性敵論」的なニュアンスがあるように思われる。

ここでは、目次を紹介することにより、内容の紹介に代えたい。

プロローグ 女性学の誕生

1 つくられる女の子……幼児期における性役割の形成

- 2 女子と男子の学校生活……教室の中での性役割の形成
 - 3 恋愛と結婚……“結婚幻想”はこうしてつくられる
 - 4 母になるということ……根強い母性信仰
 - 5 働く女たち……職場における性差別
 - 6 主婦の一日……なぜ病むのか
 - 7 変わる女の一生……人生80年時代
- エピローグ 女性学のセカンドステージ

「女性学」と「男性学」をセットでとりあげるのが、私の「女性学ゼミ」の特徴である。そこで、「女性学」の入門書に続いて、「男性学」の入門書として、日本における「男性学」のパイオニアの一人である伊藤公雄氏の『男性学入門』（作品社）をとりあげた。

著者の男たちへのメッセージは「＜男らしさ＞の鎧を潔く脱ぎ捨てよ！」であり、社会の進むべき方向の提言は「男も女も、家庭も仕事も！」である。また、著者が考案した「男の生活自立度チェック」は、「妻のパンツを外で干せますか？」という質問であり、ユニークな著者の提案は学生たちにも好評であった。私は「男はつらいよ」をもっと女性に理解してほしい。

- 第1章 悩める“男の一生”……現代男性論
 - 第2章 ＜男らしさ＞って何だろう？……「男のメンツ」の中身
 - 第3章 男の目で見直す男性社会……＜男性学＞の現在
 - 第4章 文化と歴史の中の男と女……ジェンダー論入門
 - 第5章 男性のための（そして女性のための）女性学入門
 - 第6章 「働く主夫」の生活と意見……体験的主婦論
 - 第7章 ニッポンのお父さんたちへ……現代父親論
 - 第8章 もっと群れよう、男たち！……“メンズ・ムーブメント”のすすめ
- おわりに ぼくが＜男性学＞をはじめた理由

以上が、「演習1」（1年生後期）でとりあげた、「女性学」と「男性学」の2冊の入門書である。

「演習2」（2年生前期）では、まず、短大教育をジェンダーの視点からみた優れたエスノグラフィ^{注)}である、松井真知子『短大はどこへ行く……ジェンダーと教育』（勁草書房）をとりあげた。

注) エスノグラフィとは、研究者が研究対象とする日常生活の場に、一定期間滞在してフィールドワークすることによって、すなわち観察、参与観察、文献分析、インタビューなどさまざまな方法を駆使することによって、対象を解釈、分析、記述していくプロセスとその方法をいう。

本書は、関西のある私立女子短大において、10 か月間、著者が学生や教員とのインタビューを通して、あるいは授業参観などから得られた豊富なデータを素材に構成されている。著者が短大教育に関心をもったのは、日本の高等教育がみごとにジェンダー化されており、他の先進資本主義国でも比類のない職業構造における性別分業構造と連動しているからである。学生たちから語られたことは、恋愛、結婚は言うに及ばず、就職、職業と家庭の両立、女性の自立、学校や職場や家庭の性差別という、きわめて広範な内容を含んでいた。短大生の生活と意識を、彼女たちの視点から詳細に記述した文献として、県短の学生と教員は是非一度は目を通すべきであると思う。

第一章 変わりゆく短期大学

第二章 白藤女学院短期大学

第三章 白藤女学院のジェンダー文化

第四章 学生たち

第五章 クラスルーム 1

第六章 クラスルーム 2

第七章 国際化とはどうすることか

第八章 女性学は学生を変えるか

第九章 短大はどこへ行く

付 論 研究方法をめぐって

次に、女性の社会参加が最も進んでいる国、スウェーデンをインタビューを中心にわかりやすくまとめた、岡沢憲芙『おんなたちのスウェーデン……機会均等社会の横顔』（日本放送出版協会）をとりあげた。

スウェーデンでは、閣僚も国会議員・地方議員も、約3人に1人が女性である。また、16歳から64歳までの女性は、学生や出産・育児休暇をとっている者以外は、ほぼ全員が働いている。

なぜスウェーデンでは、1970年代以降、女性の社会参加が著しく増えたのか。その結果、男性の仕事や生活、考え方はどうなったのか。そして、スウェーデン社会はどう変わったのか。

日本と鹿児島における、女性の社会参加についての今後の展望を見いだすために、このようなスウェーデンの経験は一つの参考になると思い、本書をとりあげた。

第Ⅰ章 いま、なぜ女性か、スウェーデンか

- 1 日本の超高速高齢化と出生率低下のダブル・ショック
- 2 高齢化社会への政策対応……10のシナリオ
- 3 スウェーデンの経験から学ぶ

第Ⅱ章 女性が活躍できる国

- 1 女性の社会参加……ごく自然に、ごく軽やかに
- 2 パブリック・セクターは社会参加の突破口
- 3 女性の政界進出
- 4 女性議員を増やすために
- 5 パラダイスに一番近い労働者……育児もキャリアも

第Ⅲ章 女が変わると世の中が変わる

- 1 女性環境が高度に整備されたのはなぜか
- 2 女性運動の歴史
- 3 男女のライフ・スタイルの変革

第Ⅳ章 スウェーデン

- 1 高福祉・高負担の問題点
- 2 EU統合とスウェーデン
- 3 女性の社会参加を加速するために

Ⅱ. 学生による「女性学ゼミ」の評価

学生が「女性学ゼミ」をどのように評価しているのか、2000年1月にゼミ生7名を対象に、簡単なアンケート調査を実施した。回収できたのは5名分で、回収率は71.4%である。

アンケート項目は三つである。

一つは、「あなたは『女性学』を学んでよかったですか？」という問いに対して、「よかった、よくなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点がよかった（よくなかった）ですか？」と問うものである。

二つ目は、「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思いますか？」という問いに対して、「役に立つと思う、役に立たないと思う、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点が役に立つと思いますか？」と問うものである。

三つ目は、「ゼミでは4冊のテキストをとりあげましたが、それぞれの感想を教えてください」というもので、とりあげた4冊のテキストそれぞれについて、感想を書くための自由回答欄を設けた。

サンプル数が少ないため、必ずしも正確な評価とは言えないが、「『女性学』を学んでよかったか？」の問いに対しては、4名が「よかった」と回答し、1名が「どちらともいえない」と回答している。具体的なよかった点について紹介すると、次のようなものである。

小森：「女性学ゼミ」の実験（5）

「女性は男性社会では不当に扱われている半面、女性も甘えている面がわかった。男女ともに経済的自立が必要であることを学んだのがよかった。自分が社会に出て働く意味が見つけられた。」

「今まで何も考えずに生活してきて、常識（あたりまえ）のことだと思っていたことも、実は男性と女性という差別を受けていたんだと知ることができた（育てられ方、学校生活など）。職場にしても、女性という地位に置かれ、いろいろな問題があることを知った。」

「働きたくないなあと専業主婦願望だったが、女性も働くべきだと思った。」

「いろいろな人の考え方を知ることができ、視野が広まった。また、今まで新聞などでサラッと目は通していた話題ではあったが、ゼミでとりあげたことを機に注意をしてみるようになり、問題意識が深まった。」

二つ目の「社会に出てから『女性学』を学んでいたことが役に立つと思うか？」の問いに対しては、2名が「役に立つと思う」と回答し、3名が「どちらともいえない」と回答している。まず、具体的な役に立つ点について紹介すると、次のようなものである。

「社会に出れば、様々なことに遭遇すると思う。そんな時、頭の片隅にでも学んだことが残っていたならば、何かしらのヒントや突破口になるのではないか。」

「なあなあと生活できなくなった。」

結婚しても、子供が生まれても、働くべきであることを知った。

セクハラ問題にも興味をもった。今から新聞をチェックしようと思う。」

他方、「どちらともいえない」と回答した者の意見を紹介する。

「社会における男女平等を自分は望んでいても、実際には差別を受けるだろう。それに対して、女性学を学んだことによって、望ましい社会を考えることができると思うが、その考えや意見が良い方向に取り入れられるかはわからないし、自分一人の個人的な考えに終わってしまうかもしれない。」

「例えば社会に出て、私が『女性と男性で差があるのはおかしい』と上の人に言った場合、明らかに自分のイメージがダウンすると思う。今の労働環境の中では、『女性学』で学んだことを主張するのはむづかしいことだと思う。」

「上司などまわりの人の言葉に、私は過敏に反応してしまう。彼氏ができても、相手のおもいどおりの女にはなれませんね。」

三つ目の「4冊のテキストの感想」については、次のとおりである。

①『女性学への招待』

「女性の問題について幅広く書かれた本であったので、最初にとりあげたのはよかったと思う。読みやすい。」

「『女性学』への導入という面では、わかりやすく書いてあったので、すんなりと入りこめた。ただ、筆者の意見に100%賛同できないところもあった。」

「私たちがいかに女らしさを義務づけられ、育てられているかはっきり知ることができた。女として男をたてる、女だから料理をする、女だから短大でよいなどなど、女であるために父親から差別され育てられたなあと感じた。社会全体がそうであったことも悲しい。今でこそ男女差別が見直されてきているが、今後、男女平等が進んでほしいと思った。」

「女性は今まですごく損をしていると思った。職場でも女性と男性では明らかに差があることもわかった。これから女性はどんどん社会進出していくと思うので、女性のための労働環境づくりが必要であると思う。」

「この本により、女性学に興味をもてた。」

「男性に頼るだけでなく、自分の仕事をもってはじめて、自分の意見を男性や夫に言えるのである。」

②『男性学入門』

「一方的に女性ばかりが弱者になるのではなく、男性もまたさまざまな問題を抱えていること、大変なことがわかりよかった。男性の気持ちは女性にはわからないので、この本はよかった。」

「女性には女らしさが求められると同時に、男性には男らしさが求められ、育てられる。そして、男らしさという固定観念が根強く残っていることがわかった。」

「男性が家事・育児に参加するのは、当然である。女性の負担を軽くするためにも、夫婦で協力するべきだと思った。」

「とてもわかりやすい文章と内容で、一番好感のもてる本だった。」

「興味をもった。男性の心理がわかり、結婚するときに役立てようと思う。」

③『短大はどこへ行く』

「短大の抱えている問題を取りあげていたが、異常に問題視しているようで好きにはなれなかった。」

「短大だからと言って差別するのはおかしい。私にはちょっとむづかしかったから、よくわから

なかった。」

「少し要旨をまとめるのに時間がかかった。

今時の女の子について、いろいろな角度から分析していたため、自分とおきかえて考えることができた。」

「あまりピンとこなかった。中には短大生の気持ちがわかるという部分もあったが、県短と違うようなので、理解しがたかった。」

「短大という中途半端な学校があるべきなのか、必要ではないのか、考えさせられた。短大の実態が自分の今の状況にあてはまるところもたくさんあった。でも、ゼミという制度はとても大切なことだと思う。4年制大学にはほど遠い勉強ではあるが、2年間という短い間で頑張れるには自分次第だと思った。みんながみんな4年制大学に行けるならそれはそれで良いと思っていたが、短大という2年間もとても大切だと思った。」

④『おんなたちのスウェーデン』

「スウェーデンは素晴らしい！女性がまさにスウェーデンを支えていると思った。恵まれた労働環境、社会福祉、教育制度など、日本にいる私には信じられないことだった。でも、社会が女性たちを男性と同じように必要としている。その考え方に感動した。詳しく勉強してみてよかった。」

「スウェーデンの政策は女性にやさしいばかりでなく、社会全体の利益になるのだということをわからせてくれた。日本もスウェーデンのよいところをとりいれてほしい。」

「スウェーデンの福祉政策はすごく進んでいると思った。高負担ではあるが、その分しっかり福祉対策ができていいと思った。日本も見習えるところはとりいれるべきだ。」

「女性が社会参加するための環境が非常に整備されているスウェーデンの現状、プロセスがよくわかった。今、日本がぶち当たっている壁を乗り越えてきたこの国の政策に感動するものがあった。日本の政治家も個人も、これらの国のことを勉強し、少しでも参考にしたらよいのではと思った。」

「少子化について卒論を書くのにおおいに役にたった。

高い税金だが、それなりの生活を保障されているスウェーデンに友人と住みたい。」

おわりに

早いもので、「女性学ゼミ」も4度目の卒業生を送り出す時期になった。

「女性学ゼミ」のテキストとして、『女性学への招待』『男性学入門』の2冊の入門書はほぼ定着したと言えよう。「『女性学』と『男性学』を同時にとりあげるのがおもしろい。男性ならではの

視点だ」と評価してくれた友人もいて、私は意を強くしている。

私は『短大はどこへ行く』はなかなかの好著と高く評価していたのだが、今回のアンケート結果では「むつかしい」など、厳しい評価となっている。

他方、今回初めてとりあげた、岡沢憲芙『おんなたちのスウェーデン』は、アンケートではすこぶる好評であった。これは、女性の社会進出が進んだスウェーデンに対する憧れをも含めた、著作の内容に対する高い評価と、インタビューを多用した著者の読みやすい著述方法によるものであろう。学生には「スウェーデンに住みたい」という意見も多かった。「西ドイツに住みたい」という学生を多く生み出した、暉峻淑子『豊かさとは何か』の二の舞いになってはいけないと思い、スウェーデンの経験を一つの参考モデルとして、日本を（そして鹿児島を）女性が（そして男性が）暮らしやすい社会につくりかえるために働きかけることの重要性を強調したつもりだが、学生たちをどこまで納得させることができたのかについては、率直に言っていささか心もとない。